



沖縄・与那国島における近現代の社会変動と〈民俗文化〉の動態

——文化概念の再想像——



原 知 章

概 要

沖縄・与那国島（以下、「与那国」と表記する）は、琉球列島の最南端を占める八重山諸島中の一島であり、「国境」を隔てて台湾に隣接する日本国最西端の島である。他の八重山の島々から遠く離れて位置し、島外との交通が困難であり、また、島外との交通なくして島の人びとが生活することができる自然環境を有する与那国は、まさに「絶海の孤島」、そして「小宇宙」と表現するにふさわしい島である。このような「絶海の孤島」、そして「小宇宙」であったからこそ、与那国社会にとって、人・モノ・貨幣・情報の広範な移動をもたらした近代以後の、とりわけ第二次大戦後の社会変動のインパクトは一層大きかったと考えられる。

しかし、これまで与那国を対象地域とした文化人類学的（あるいは民俗学的）研究においては、与那国の〈民俗文化〉の特異性や辺境性が注目され、与那国の「孤島性」が浮き彫りにされることはあっても、与那国における近現代の社会変動と民俗文化の関係性はほとんど問われることがなかった。さらにいえば、与那国を対象地域とした研究にかぎらず、従来の沖縄研究では、近現代の社会変動や、近代的制度としての政治、経済、法、あるいは近代的な科学技術を基盤としたマスメディアといった文化領域はほとんど視野の外におかれてきた。その意味で、従来の沖縄研究は「視野狭窄」に陥っていたといえる。この視野狭窄は、ひとつには、従来の沖縄研究の主要な研究関心が伝統的な沖縄の文化に集中してきたことに由来する。しかしそれと同時に、この「視野狭窄」は、従来の沖縄研究が前提としてきた文化概念にも由来すると筆者は考える。

以上に述べた問題意識のもと、本論文では、(1) 従来の沖縄研究が前提としてきた文化概念を批判的に検討し、文化概念を再想像 (reimagine) した上で、(2) 与那国を中心として、沖縄における近現代の社会変動と民俗文化の動態の相関を具体的事例に基づいて明らかにすることを試みた。

第1章では、従来の沖縄研究において前提的概念とされてきた「文化」を批判的に検討し、文化概念を再想像することを試みた。はじめに、先に述べた通り、従来の沖縄研究においては、近代的制度としての政治、経済、法、あるいは近代的な科学技術を基盤としたマスメディアといった文化領域や近現代の社会変動がほとんど視野の外におかれてきたことを指摘した。そして、この沖縄研究の「視野狭窄」の原因のひとつを、従来の沖縄研究の前提となってきた実体的文化概念に求め、実体的文化概念の問題点を指摘した。

つぎに、1980年代のポストモダン批評以後の文化人類学において実体的文化概念が俎上に載せられてきたことに触れ、近年提出されている文化概念放棄論を検討した。そして、文化概念放棄論における文化概念批判に一定の意義を認めつつも、その問題点として、(1) 文化概念の多様性・多元性、あるいは文化概念が用いられる文脈を考慮することなく、文化概念は本質的に問題を抱えていると論じている点、(2) 文化概念が文化人類学界の再生産の過程と深く結びついている現実を、無視、もしくは隠蔽しており、かえって従来の文化概念を温存させることにつながりかねない点、という二点を指摘した。

以上の議論をふまえ、また、文化が観察者の認識から離れて実在するもの、あるいは観察者が客観的に観察することができる実体 (entity) ではなく、理念型として構築された

ものであり、その意味で想像の産物であることを確認した上で、文化概念を放棄するのではなく、以下に論じるように文化概念を再想像することを試みた。

まず、従来の沖縄研究において前提とされ、また、1980年代のポストモダン批評以後、批判の対象とされてきた実体的文化概念における文化の想像の仕方を「文化の領土化」と呼んだ。実体的文化概念では、文化は、特定の地域や人間集団とあらかじめ結びつけられて「領土化」されてきたのである。

つぎに、「遺伝」や「自然」と対置されうる大文字・不可算名詞としての〈文化Ⅰ〉(Culture/ culture in general)と、小文字の・可算名詞としての〈文化Ⅱ〉(cultures/ discrete cultures)という区別が導入し、「文化の脱領土化」による文化概念の再想像を試みた。すなわち、〈文化Ⅰ〉を、「非遺伝的な手段による情報伝達のプロセスや、その情報伝達の産物」と定義した上で、〈文化Ⅱ〉として民俗文化・公式文化・大衆文化・学問文化という四つの文化領域を理念型として設定した。

ここでいう民俗文化 (folk culture) とは、対面的な場におけるおもに身体を媒介とした直接的コミュニケーションによって伝承されてきた文化領域であり、そのような直接的コミュニケーションの連鎖のプロセスとその産物のことである。民俗文化は、人間が生み出すあらゆる文化の基盤であり、人類の歴史の大半は、民俗文化の蓄積、展開の過程として捉えることが可能である。

公式文化 (official culture) とは、教科書や文化財など公的機関によって認可された事物を媒介として形成される文化領域である。公式文化の主要な送り手となるのは、国民国家や地方自治体であり、その受け手、あるいは担い手として想定＝想像されているのは「国民」や「町民」である。

大衆文化 (mass culture) とは、テレビ、新聞などのマス・メディアや様々な商品を媒介として形成される文化領域である。大衆文化の主要な送り手となるのは、民間企業であり、その受け手、あるいは担い手として想定＝想像されているのは「視聴者」や「消費者」である。

そして学問文化 (academic culture) とは、学術論文や学術書などを媒介として形成される文化領域である。学問文化の主要な送り手となり、また、受け手となるのは、「研究者」や「専門家」の集団である。

本論文では、以上の四つの文化領域を理念型として設定した上で、近現代の社会変動の過程で、民俗文化が、公式文化・大衆文化・学問文化とどのように関わってきたのかを問題化するという視座を提示した。そして、この四つの文化領域の相関モデルの利点として、(1) 特定の地域を越えて広がり、移動・流通するような文化領域や、特定の人間集団の内部における社会的属性・役割の違いから生まれる文化的差異を視野におさめることが可能になる点、(2) 単純なモデルであるがゆえにイメージを喚起しやすく、応用可能性が高く、また、社会との対話を進めるうえでも有用である点、(3) 従来、見過ごされてきた民俗文化と政治・経済などの領域の関係を視野におさめ、また、学問的営為を反省的に捉え返す視点を内包している点、(4) 「〇〇 (地域や人間集団) の文化」を実体としてではなく表象として捉え、その表象の生産・流通・受容過程を検討することが可能になる点、という四点を挙げた。

第2章では、本研究の主要な調査地である与那国の概況とフィールドワークの概要を

述べ、第3章では、与那国をふくむ八重山諸島の歴史を叙述した。そして、第4章から第7章までの議論では、近現代における口承伝承（第4章）、民俗的知識（第5章）、死者儀礼（第6章）、アイデンティティ（第7章）の動態を具体的事例として取り上げた。また、第8章では、島嶼地域において人類学的調査・研究を行なっていく上での前提と課題を論じ、特にド・セルトーの議論をふまえて、「戦術としての人類学的実践」の構想を提示した。

第1章で提示した視座から具体的事例を取り上げて民俗文化の動態を論じた第4章から第7章までの議論では、以下の考察を行なった。

第4章では、今日、与那国において聞くことができる「かつて与那国では外敵を避けるために大草鞋を海に流していた」という大草鞋の伝承を取り上げた。この大草鞋の伝承は、与那国の人びとの間で「口承」によって今日まで連綿と伝承されてきたというよりはむしろ、明治期以後、外部の研究者による記述、あるいは地元知識人による伝承の記述と絡み合いながら、今日まで持続し、また、変容してきたと考えられる。すなわち、明治期から今日にいたるまでの大草鞋の伝承の動態は、〈民俗文化〉と〈学問文化〉の相関として把握できるのである。

戦前において、大草鞋の伝承は、与那国と台湾の歴史的関係を物語る伝承として外部の研究者によって取り上げられた。その背景には「与那国はたしかに日本の一部である」ことを論証しようとする国民国家、あるいは日琉同祖論のまなざしが存在した。一方、戦後においては、大草鞋の伝承は、マチリという与那国独自の文化の起源を物語る伝承として取り上げられた。その背景には「与那国の文化」の独自性・固有性を明らかにしようとするまなざしが存在した。

戦前は多様であり曖昧さをはらんでいた外部の研究者の言説が、戦後、斉一的になり、大草鞋の伝承をマチリの由来として語る言説が標準的・権威的になっていった「正典化」の過程は、大草鞋の伝承をめぐる言説から台湾という地名が消去されていった過程でもあった。〈民俗文化〉と〈学問文化〉の相関として把握することができるこの正典化の過程とは、台湾先住民族に対する戦前の他者認識の忘却をともなうような大草鞋の伝承の無害化、そして脱政治化という過程でもあった。

第5章では、今日、与那国においてフンチとよばれる民俗的知識を取り上げた。フンチ、あるいは沖縄島においてフンシーやフンシとよばれる民俗的知識の源流は、中国の「風水」に求められる。中国から琉球王国に風水が導入され、諸政策の中で活用されていた当時は、風水の知識は、思想、あるいは世界観とよびうる知識・観念の体系に裏打ちされていたと考えられる。しかし、風水の知識は、18世紀から19世紀にかけて民間に広く普及し、土着化する過程で変容してきた。現在、墓造営の過程において活用されているフンチの知識は、一定の思想や世界観を反映しているというよりはむしろ、一種の「モジュール＝基本単位」として捉えることができる。しかも、与那国の人びとは、このモジュールとしてのフンチを厳密に適用しているわけではなく、柔軟かつ状況対応的に、時にはより単純な計算に変形して実践しているのである。

こうしたフンチ、あるいはフンシーをめぐる実践と言説は、近年、あらたな変容の局面にさしかかっているように見える。1980年代以後、沖縄島のフンシーが、古代中国に由来する風水として、学術的対象として注目されるようになり、また、広く日本社会におい

て「フウスイ」の語が普及していった。さらに1990年代以後、フンシーは、建築、観光、行政などの領域において、中国に由来する風水として語られるようになり、「沖縄の伝統文化」の対外的な表象となってきた。すなわち、近年のフンシーをめぐる実践と言説の動態は、〈民俗文化〉、〈公式文化〉、〈大衆文化〉、〈学問文化〉の相関として把握できるのであり、今後、フンシーをめぐる実践と言説も同様に変容していく可能性を有している。このように、フンシーをめぐる実践と言説がさまざまな領域に拡散していった背景のひとつとして、先に触れたとおり、1980年代以後、広く日本社会において「風水」に対する関心が高まっていたことを指摘することができる。しかし、フンシーをめぐる実践と言説の拡散は、こうした「風水ブーム」に還元できるものではない。たとえば、読谷村における役場新庁舎建設の交渉のなかで語られた風水とは、沖縄戦において米軍によって破壊され、その後、米軍によって基地・軍用地として接収される以前から、その土地を生活の場として暮らしてきた住民にとっての個人的な、そして集合的な〈土地の記憶〉を集約的に表現した概念であった。

第6章では、今日、与那国において、「儀礼の社会的機能」がしばしば語られる死者儀礼を取り上げた。戦前の与那国における死者儀礼は、参加者の規模・範囲が小さく、供物・料理・香典返しなどの面でもささやかであったが、戦後は、参加者の規模・範囲が拡大し、供物や香典などの面でも「派手」になっていった。このように死者儀礼が全般的に大規模かつ「派手」になっていった要因としては、(1) 貨幣経済・市場経済の浸透に伴う所得ならびに物質的な豊かさの増大、(2) 冠婚葬祭の簡素化を推し進めた戦前・戦中の生活改善運動による規制の解除、(3) 戦後の与那国の人口変動、という三つの要因を挙げることができる。(3)の要因について説明すれば、1960年代以降に急速に進んだ人口流出は、島内にとどまった人々の社会的紐帯を強化すると同時に、他方では各家庭や個人を相互にますます可視化し、自分たちの家が主宰するにしても、他家が主宰するにしても、死者儀礼を行なうさいには、社会的な体面に不備が生じることがないように細心の注意をはらわねばならない、という相互に規制するまなざしを強化してきたと考えられる。戦後、規模が拡大し、「派手」になってきた死者儀礼のあり方をめぐっては、与那国の人びとのあいだでもこれまで議論がなされてきた。こうした議論の契機となったのは、1950年代から展開した生活改善運動（生改運動）や新生活運動という〈公式文化〉であった。行政当局の指導により進められたこれらの活動は、冠婚葬祭の簡素化を主要な活動目的として掲げていた。しかし、これらの活動は、死者儀礼の簡素化に関しては、ほとんど目的を達成することができなかった。

与那国の死者儀礼には、(1) 年長者の年少者に対する優位という社会的秩序の再認する機能、(2) 男性の女性に対する優位という社会的秩序の再認する機能、(3) 参加者の社会的紐帯を強める機能があると考えられるが、このうち、今日、与那国においてしばしば語られるのが、(3)の参加者の社会的紐帯を強める機能である。すなわち、死者儀礼は「コミュニケーションの場」であり、「人間の和、ネットワークをつくる場」であるというのだ。このように参加者の社会的紐帯を強めるという死者儀礼の社会的機能がしばしば語られるようになった主要な背景としては、生改運動・新生活運動という〈公式文化〉の流入を契機として死者儀礼のあり方が議論の対象となり、そして、生改運動・新生活運動という〈公式文化〉が死者儀礼の簡素化に挫折してきたという歴史的経験があると考えられる。

その意味で、今日、与那国において聞かれる死者儀礼の社会的機能をめぐる言説は、〈民俗文化〉と〈公式文化〉の相関として把握できるのである。

第7章では、現代の沖縄におけるアイデンティティの動態の一端を明らかにするために、沖縄におけるNHK大河ドラマ『琉球の風』の受容という事例を取り上げた。沖縄を舞台とした初の大河ドラマである『琉球の風』の制作が明らかになったあと、沖縄島では、首里城の復元とあいまって「琉球王朝ブーム」がおこった。しかしドラマの放映が開始されると、ドラマの評価をめぐってさまざまな議論がおこり、これらの議論をふまえて、最終的には『琉球の風』ウチナーグチ版が制作されることになった。他方、沖縄県内の他の地域では、沖縄島とは異なる仕方で『琉球の風』が受容された。『琉球の風』のなかで、〈琉球人〉というアイデンティティが呈示されたとき、それは、つねに奄美諸島から与那国までをふくむ琉球王国の旧版図の全域に住む人びとを包括するような集合的自己のアイデンティティとして呈示されていた。これに対して『琉球の風』の評価をめぐる議論のなかで「ウチナーンチュにしかわからない／ウチナーンチュだからわかる」という形で〈ウチナーンチュ〉としてのアイデンティティが呈示されたとき、それはあたかも『琉球の風』の中で呈示された〈琉球人〉というアイデンティティと同一であるかのように呈示されたが、実際には、琉球王国全域ではなく、沖縄島の出身者という集合的自己のアイデンティティとして呈示されたのである。沖縄島では、〈ウチナーンチュ〉としてのアイデンティティ以外に、〈クニンダンチュ〉としてのアイデンティティが、『琉球の風』への反響のなかで呈示された。そして八重山諸島では、〈琉球人〉からも〈ウチナーンチュ〉からも距離を置くようなアイデンティティが琉球王朝ブームに対するアンチテーゼとして呈示された。ただし八重山諸島のなかでも、『琉球の風』の撮影ロケが行なわれ、琉球王国の地域的多様性や「ボーダーレス感覚」を表象する舞台としてドラマのなかで取り上げられた与那国では、『琉球の風』に対する不満・批判の声もたしかに聞かれたものの、それ以上に「『琉球の風』によって与那国を全国にPRすることができた」、「『琉球の風』を観光振興に役立てよう」という声の方が大きかった。その背景にあったのは、過疎化に対する危機感と、1980年代後半から急速にすすんだ観光立島化であった。

こうした沖縄における『琉球の風』へのさまざまな反響のなかで、『琉球の風』ウチナーグチ版の制作に結びつく原動力となったのは、沖縄島を中心として流通している地方紙等のメディアにあらわれた沖縄島における『琉球の風』への批判的な評価であった。しかし、メディアにあらわれた『琉球の風』の批判的評価、そしてそこで呈示された「ウチナーンチュ」としてのアイデンティティが、沖縄島の人びとによる『琉球の風』の受容の「生きられた経験」を透明かつ中立的に代表＝表象していたと理解することはできない。むしろ、『琉球の風』の批判的評価や、そこで呈示された「ウチナーンチュ」としてのアイデンティティはメディアを介して構成された現実であると捉えるべきである。そして、こうした視点をさらに進めるならば、『琉球の風』への反響のなかで、あたかも琉球王国の旧版図全域を包括するかのように呈示された〈ウチナーンチュ〉というアイデンティティ、あるいは自他認識は、超歴史的な実体というよりはむしろ、とりわけ1980年代以降、沖縄の歴史・文化に対する「自信」と「誇り」が醸成されていく過程で、何重にもメディアによって媒介されながら拡大再生産されてきた歴史的産物として捉えることができる。すなわち、近現代の沖縄におけるアイデンティティの変遷には、日々の対面的コミュニケー

ションを通じて育まれる〈民俗文化〉、日本国政府や米国民政府の「日本人観」や「沖縄人観」という〈公式文化〉、日琉同祖論のような〈学問文化〉だけでなく、新聞・テレビのような〈大衆文化〉も関わってきたと考えられる。換言すれば、近現代の沖縄におけるアイデンティティの動態はこれら四つの文化領域の相関として把握できると考えられるのである。

以上に要約したように、本論文では、近現代の社会変動の過程で民俗文化が公式文化、大衆文化、学問文化とどのように関わってきたのかを問う視座から口承伝承、民俗的知識、死者儀礼、アイデンティティの動態を具体的事例として取り上げて記述・分析を行なった。このような視座に立つことで、従来の沖縄研究において視野の外におかれてきた文化領域や近現代の社会変動を視野におさめ、また、従来、特定の地域や人間集団とあらかじめ結びつけられて論じられてきた〈民俗文化〉や、研究対象の〈民俗文化〉から切り離されて「研究史」としてのみ把握されてきた〈学問文化〉に対して、新たな光を当てることができたと考える。また、本論文全体を通じて、近現代の沖縄社会において、民俗文化が、公式文化・大衆文化・学問文化と決して無関係ではないだけでなく、それらと密接に関連し、相互に影響を及ぼしあってきた様相を明らかにすることができたと考える。本論文で提示した視座は、沖縄だけでなく、他地域における研究にも敷衍することができるであろう。現代社会は、空間的外延を異にする民俗文化、公式文化、大衆文化、学問文化などの複数の文化が重層的に接触し、交錯する境界領域やコンタクト・ゾーンとして捉えることができるのである。